

私の視点

小代 有希子

日本大教授(国際関係論)



投稿は〒104・8011(住所不要) 朝日新聞オピニオン面「私の視点」係か、siten@asahi.comへ。ブログやホームページに掲載していいもの、新規の原稿に限ります。電子メディアにも収録します。

「日本の記憶」残す手立てを

サイパン

リゾート地として知られるサイパンと日本を結ぶきずなが消えつつある。太平洋戦争の激戦地となった同島は、戦前日本の委任統治領でもあった。当時皇民化教育を受け、日本語を学んだ先住民族のチャモロやキャロリアンの人々は、今や若くても70歳代半ば。高齢化が進んでいる。

ある神社がジャングルの中になつ。戦前同島にたてられた神社の多くは朽ち果てたが、ここは今でも日本語を話すチャモロ人G氏に守られ保存状態が良い。チャモロ料理店主Eさんは流暢な日本語で、戦前の女学校時代や戦争中の思い出を語り、童謡「赤い靴」とそのチャモロ語の替え歌を聞かせてくれる。公立マナムコ敬老センターではお年寄りがお手玉や軍歌、教育

勅語まで披露してくれる。

「戦前日本はサイパンの開発に尽くしたから、懐かしがつてくれている」と考えるのは早計だ。日本統治下、彼らは「三等国民」「土人」として扱われた。当時の日本人の差別意識を指摘する老人もいる。彼らは日米の戦争の巻き添えとなり、苦難と犠牲を強いられた。戦後米国が島の新たな支配者になると、彼らは米国流を取り入れ、英語を学んだ。Eさんは「結局私たちは日米のはざまで翻弄されてきた」とつぶやく。戦前日本統治に協力した父を持つG氏は、複雑な思いからか、なぜ神社を守るのか語らない。

戦後日本人は植民地の記憶を封印し、海外にまいた日本文化の種を振り返らなかつた。一方、サイパンの人々は日本への相反する思いを抱えながらも日本文化を継承してきてくれた。今「日本の国際化」を叫ぶなら、まず彼らに問いかけるべきではないか。「私たちはいかに感謝し、謝

罪すべきでしょう」と。

残された時間は少ない。戦前日本の製糖工場が所有していた木造日本家屋の社宅にいた父が工場で働いていたというキャロリアンのCさんが住み、維持に努めてきた。だが彼女は今夏老衰で亡くなった。G氏も、自分の死後、息子が神社を守ってくれるかどうかかわからないそうだ。

植民地支配を媒介とした日本の国際化は未熟なものだった。今、真正面からそれを考え直すために、生き証人の言葉を記録し、風化する一方の日本統治時代の建造物を保存する手立てを考える必要がある。祖父の代から日本人の血を引くチャモロの若者も珍しくない。日本のポップカルチャーに関心が高く、過去にこだわらない彼らに「消えゆく統治時代の日本文化」のことを振り返る機会を提供し、ともに前向きに「過去」を考えることもできる。

観光業の低迷など財政の逼迫に苦しむサイパンは、歴史保存に到底手が回らない。日本の官民双方による知恵と資金の提供が強く望まれる。